

一般兵 三六人（戦死二九人）（生還 七人）
軍属 九〇人（戦死五九人）（生還二九人）

飛行第二〇〇戦隊指揮系統

南方軍總司令官 寺内寿一元帥
第十四方面司令官 山下奉文大將
第四航空軍司令官 富永恭次中將
第三十戦闘飛行集團長 青木武三少將
飛行第二〇〇戦隊長 高橋 武中佐
整備隊長 及川修次大尉

〔編注〕

猪股義博氏の手記(一)はXIII巻に掲載されておりま
す。

私の戦争体験

高知県 大崎 良男

我が日本の国力すべてを投入した太平洋戦争が
終結して早くも五十余年。「歳月は人を待たず」
とか、本当に早いものだと思います。

悲惨な終戦、今もなお人に語るも涙、聞くも悲
しき次第で、まして書くなど本意ではありません
が、国政を預かる国会議員から「太平洋戦争は侵
略戦争であった」との発言を聞き、ペンをとるこ
とにしました。

当時は、国の命ずるままに若き命を自ら捨てる
徴兵制度が、日本国民男子の三大義務の一つでし
た。彼らの心中、家族の胸中を察すると義憤やる
かたありません。

私達一般国民には是非曲直を論じて自由を主張
することなど許されるはずもなく、もしそのよう

な発言をしようものなら「非国民」として直ちに捕らわれの身となったことでしょう。

二度とあつてはならない

子々孫々に伝えたい

日中戦争に続く太平洋戦争。それは、この日本において歴史上最も大きな出来事であります。

戦勝国に対し昭和二十（一九四五）年八月「無条件降伏」という最悪の事態を招き、国の存立すら危ぶまれるなど世界史に類例はありません。このようなことが二度とあつてはならないよう子々孫々に伝えていかなければならないと思つています。

幾万幾十万の国民が死亡。負傷者も……

領土は、南樺太・千島列島・太平洋上の島々も利権を失い、朝鮮、台湾は独立しました。

軍人は、戦死や病死あるいは捕虜の身に……幾万幾十万人の国民は爆撃や銃砲撃などで死亡、負

傷者が続出。家や職場を失って路頭に迷う人々の姿を思い出すと断腸の思いが致します。

終戦を北海道帯広市で……。

敗戦国のみじめさ実感

私は、あの終戦を、北海道帯広市の航空隊で迎えました。海上の支配は全て米軍の手中にあつて、千島方面への輸送船の多くが潜水艦の攻撃目標となり、海の藻屑と消えました。

また「樺太に在住の日本人多数が集められて焼き殺された」との情報から、夜間を利用して小さな船で北海道に逃げ出そうとした方々も銃撃されたとか。数年前、北海道の近海で三隻の船が引き揚げられています。

昭和二十年、終戦の帯広より四国の地へと戦友二人汽車便で帰りました。高松まで十日間を要し、その間米を食べたのは二回、他は乾パンで食を満たしました。

青森の駅では、いつ出発するかも知れぬ客車を待ち、毛布にくるまって寝ている人々を目のあたりにし、敗戦国のみじめさを感じました。

飛行兵として入隊

死を覚悟しつつ新兵の指導も：

当時は「兵役」といって満二十歳になった男性は「徴兵検査」を受け、合格すれば軍隊に入らなければならぬ義務がありました。

私は、葉山村に大正十（一九二一）年に生を受け、昭和十六年に満二十歳となり、徴兵検査の結果、甲種合格。九州は熊本第三航空教育隊に「飛行兵」として入隊しました。

暑い夏の日、地域の皆様に見送られて汽車で熊本へ行きました。入隊するまでいつも私の頭にあったことは「己は何のためにこの世の中に生まれてきたのか。そして、兵役に服し死を覚悟せねばならない」。生とは何ぞ、死は目前かも知れぬと思った時、高等小学校の時教わった、八波則吉

の「人生の目的とはプラスアルファなり」を思い出しました。

熊本教育隊で単発偵察機の教育を受け、その多くは、中国に、あるいは満州へと転属命令を受けて送られましたが、私は残されて、新兵の指導にあたるよう命じられました。

このころは、太平洋の南方各地、また中国等で日夜を通じての戦闘が繰り広げられており、私も志望とは正反対の北方、秋田県の能代の飛行隊。次いで北海道。樺太の大谷飛行隊へと命ぜられるままに行きました。

南樺太に住む日本人が兵隊を慰労

身を呈しても国を守らねば：

南樺太に住む日本人の心境は、北緯五〇度を境界にソ連と接するため恐々としていました。休日になると兵舎の門前に子供たちが来て、外出する兵隊を我が家に迎え、最早配給制で不自由な日常生活をしているのに、菓子や手拭などを差出し、

慰勞に努めてくれました。「身を呈しても国を守らねば……」と感じたことでした。

樺太は当時、大きな石油資源と平坦な土地に大木のパルプ材が取れ、そして世界的にも指折りの魚類が生息するオホーツク海があり、日本の大きな支えでありました。

伏見宮殿下のご視察で

昼夜を問わない除雪作業が二日

中国の昔の訓に「人間万事塞翁が馬」があります。中隊長当番を命ぜられた札幌の航空隊へ伏見宮殿下が汽車便でご視察する行事がありました。

当時、この地にいた兵員二千人が、鍬やスコップ等の手作業で、部隊から札幌市街までの道路の除雪作業を、昼夜を問わず二日間かかってやっと車が通行できるようになりました。

当時の早朝、中隊長殿に呼びつけられ、三〜四人の兵士と友にトラックで市街までの道路偵察を命ぜられすぐに行きましたが、除雪した雪の中に

後輪が入り、人力では動かなくなりました。

農家から馬二頭を出してもらい、トラックを引つ張ってもらいましたが思うようにはいきません。意に任せず困っていたところ、早くも警備の車を先頭に宮様がおいでになりました。

私は、このなり行きを農家で見っていました。程なく部隊より迎えの車が参り、その車で部隊に向かわれました。宮様・中隊長に申し訳なく「当番兵として励まなければ……」と心に誓いました。

非常呼集のラッパが演習？

昭和二十年、終戦の年の元旦、早朝、夜明けと共に、非常呼集ラッパの音に飛び起きて、真っ先に中隊長の官舎へと急ぎました。それが演習とは知らない私は、途中何回か氷の上に転倒し、汗まみれになったと記憶しています。

終戦 帰りの高松駅で駅長が

ねぎらいの言葉へ感涙にむせぶ

年明けと共に戦況はますます悪化。月を重ねて八月、遂に終戦となりました。前記のように十日間でやっと四国の土を踏みしめた嬉しさと、僅かな白米を駅近くの家に持ち込み、半分を差し上げて炊いてもらいました。

おにぎりの包を高松駅のホームで掂げ、何の副食もないまま食べようとすると、駅長さんが自ら、お茶と湯呑を持って来られ「ご苦労さんでした」とねぎらいの言葉をかけて下さり、戦友と感涙にむせびました。

葉山村の我が家に帰ると、上の兄は比島で戦死。次兄も病気で白衣姿で復員。今の高陵病院に食糧やたき木などを運ぶ仕事をしたが、程なく他界しました。

中隊長に再会へ歓迎さる

部下思いの中隊長への思慕の念は絶ち難く、昭

和四十三年、北海道帯広市で農機具商を営んでいる中隊長のご自宅へ挨拶に行きました。駅の改札口に戸板程の大きな「歓迎板」を立ててお迎えを頂いた嬉しさは、夢のような思い出となりました。

車で、現在の自衛隊の内部などをご案内下さいましたが、昭和五十年に他界、奥様から記念にと、背広が届けられました。

私は昔を忍ぶために、慰霊祭等で着用させて頂いています。その奥様も数年前、札幌市の老人ホームで他界されたとお聞きしております。

私の太平洋戦争のかかわりがやっと終わったように思います。国や村が平和でますます発展することを心からお祈りします。

【解説】

太平洋戦争は「侵略戦争」であったとの国会議員の発言を聞き、ペンをとることとした。

当時は、国の命ずるままに若き命を自ら捨てる徴兵制度が、日本国民の三大義務の一つであった。死んだ、或いは傷ついた、彼らや、家族の心中を察すると義憤やるかたない。

当時、我々国民には是非曲直を論じて自由を主張することなど許されてはいない。しかし、今次大戦は、日本において歴史上最も大きな出来事であった。

昭和二十年八月「無条件降伏」という最悪の事態を招き、国の存在すら危ぶまれるなど世界史に類例がない。従ってこのようなことが二度とあつてはならないと、子々孫々に伝えねばならぬと思っている。

私は終戦を北海道帯広市で向かえ、敗戦国のみじめさを実感した。

飛行兵として入隊した私は入隊するまで、私の頭にあつたことは「己は何のためにこの世に生まれて来たのか！そして、兵役に服し死を覚悟せねばならない」「生とは何ぞ、死とは何ぞ、死は

目前かも知れぬ」と思った時、高等小学校の時教わった、八波則吉の「人生の目的とはプラスアルファあり」を思い出した。

熊本教育隊で、偵察機の教育を受け、多くの戦友は、中国へ満州へと転属したが、私は残され「新兵の教育」にあたるよう命じられた。

その後、主戦場太平洋方面とは正反対の北方、秋田県能代飛行隊、次いで北海道、樺太の大谷飛行隊へ転属を命ぜられた。

南樺太勤務中、南樺太に住む日本人の心境は、ソ連と国境を接するため、恐々としていた。日本人家庭では、我々に慰労の心を示され「身を呈しても国を、これらの人々を、守らねばならぬ」と感じたことである。

また、我が隊の中隊長は部下たる我々を理解し、思慕の情は戦後までも続いた。その隊長も今は他界し、遺品の背広を慰霊祭で着用している、そして国や村が平和で発展することを祈っている。